

武書紀

四十七之八

別集

27X
21
49

武家事紀卷第四十七目錄

職掌

武家事紀卷第四十八目錄

職權



武家事紀卷第四十七目錄

別集

職掌

武家事紀卷第四十八目錄

別集

臣禮



義
武家事紀

卷第四十七 別集

職掌

武家職掌

執權

將軍家ニテ御後見ヲツトメ四海ノ政法ヲ掌ヲ執權ト云

公家執柄ニ相準スルナリ右大將家同頼家卿實朝公ノ比迄ハ執權ノ辭アラス遠江守時政陸奥守義時此職

タリ景東鑑二十六義時元仁元年ニ卒鎌倉京都忿劇ノ事ニ付テ義

時亡後二七日ヲ經テ後二品左御臺所ノ仰ニ因テ相模守

時房武藏守泰時御後見タルヘキノ旨相定コレヨリ始テ

執權職ヲ補セラル、也。義時遺跡配分ノ時、泰時云奉執

權之身於領貳等、爭強有競望トレカレハ此比ヨリ執權ト

称スルナルヘシ又執事凡云政所執事ト云ハ、又別ナリ、

東鑑云仁元元年八月時房泰時出仕政所是兩國司被奉執事之後始有此義云云

允貞應以前時政義時二代ノ執權ニハ無家令泰時補仕ノ時尾藤

左近將監景綱秀卿後胤玄番頭知忠四代孫也為武州泰時後見天福二年尾藤

左近入道道然卒平左衛門尉盛綱補之此外泰時ノ時御家人ヲ以テ家令

タラシメ玉フモノ多シ見同第三十一嘉祐二年鎌倉御所新造セラ

ル御恥北方武州泰時新造亭有之桧皮葺屋也南門東脇尾

藤太同西左衛門尉同西大田次郎南角諏訪兵衛入道

北土門東脇万年右馬允同西安東右衛門尉同并南條

左衛門尉宅等也云々又仁治二年將軍家開東射手似

繪可被圖有御沙汰自京都就被仰下為被進覽也而前

武州泰時祗候人依為達者被召出之輩可被加否及再往

沙汰前武州不可然之旨有御色代之故也雖致彼家礼

為本御家人也又勤公役之上為堪能之族依何憚可被

除哉之由遂治定横溝六郎山内左衛門次郎等尤可為

其人衆云々又開左近將監實忠平三郎兵衛尉盛綱イ

ツレモ武州ノ家令タリトモ出之是等ノ旧紀ニヨルトキハ

御家人ヲ以テ執權之家令タルトモサレハ其比ノ執權

職ハ万事ノ品殆將軍家ニコトナル事アラス。將軍家ノ儀式皆執權ノ定メナス处ナリ。コノユヘニ後ハ末大ニシテ本領ケルユヘ。將軍家ノ禮執權ニウツリテ有識モノハ不足見ノ事モ多カリキ。尊氏公ニ及テコレヲ執事職ト云。又管領尼イヘリ。義滿公ノ時直ニ管領ト称ス。而ソ三家ヲ以テ此職ノ定流タラレメ。互ニ相代テ管領タリ。此時管領イツレモ大國ノ守護タリ。其威尤甚。レ管領ノ門前ハ必下馬スルカ類ナリ。中ニモ當職ハ四海ノ下知ヲ司テ萬國ヲ下知スルニイタレリ。年々ノ烷飯其外晴ノ役皆此職タリ。當職ノ管領ハ莫大ノ大義タリ。室町家ノ後ハ執權管領ノ十ト云ニ相同ナリ。

職ハ断絶ス。信長公秀吉公以来或ハ奉行ト称レ。或大老老中ト称スルナリ。鎌倉將軍家ノ政所執事評定衆ナト云ニ相同ナリ。

鎌倉執權ハ四品ニ任スルヲ以テ極トス。武藏守東鑑三十一
卷時叙四品時召陰陽師密々仰云四品事者朝恩之至雖令自愛無勞功忽受此位天運猶危頗似不量已早可奉敬白事由到泰山府君云忠尚衣冠於南庭勤條々文草法橋圓全清書齊藤兵衛入道淨圓武州淨衣立
鳥帽子庭上令拜給云室町家管領職後ニ上階ノ輩多レレカレニ大畧四品ヲ以テ列トスル也。

執權職をタヤスカラス將軍家ノ師範トシテ、天下ノ儀則
タリコノユヘニ或ハ私ヲカヘテ奢ヲキワメ、或權威ニホコツ
テ公義ヲ傾ノ輦多ク家ヲ失身ヲ亡スノタメレ、古人其例
アリ、鎌倉將軍家ニライテハ武藏守泰時京都將軍家ニ
ライテハ武藏守頼之此兩執權、凡ニ古今ノ賢才タリ、其
制法禮樂識者ノ議ヲ不可免ノ事アリトイヘ凡ニ其志理
世安民ヲ本トシテ、一夫一婦モ怨曠ノラモイナカラシト
ラ規模トシ、其身ヲ君ニユタチテ、家ヲ利シ私ヲ逞シク
セシ志アラサルナリ、其他ハ皆中材ニシテ未尽、為臣之道况
ヤ理世安民ノ思甚薄メ、世ノ毀譽ニカセテ、其實ヲ不

致ノ類を多ナリ

執事ト云ハ、國家ノ事ヲトリラコナフ臣下ノ通称也、左傳
ニ敢告執事、ナト云ハ、國君ヲ直ニサズ其下ノ事ヲ執モノ
ノトナリ、本朝武家ニライテハ大臣ノ称ナリ、管領又古ノ
職号ニアラスコレヌ物ヲワカサトル者ヲハ、皆管領ト云ヘリ、義滿公
ハ其家ノ事ヲワカサトル者ヲハ、皆管領ト云ヘリ、義滿公
以来大臣ノ称号トシテ、京鎌倉氏ニ管領ト云ヘルナリ

京都奉行

京都ハ帝都也、コレヲ守護セレムル」、勤王政崇君威ノ
道ナルユヘニ右大將家ノ時左兵衛督能保京都ノ奉行

タリ。其後右大將家上洛ノ旅館ヲ故池大納言頼盛ノ
旧迹ニカヘラレテ、六波羅殿ト号ス。是乃平清盛旧宅ニ
相續ス。頼朝公^{建久元年}上洛歸國ノ時能保ノ子高能ヲ以テ六
波羅ノ留守居タラレムルナリ。是六波羅ノ奉行始ナリ。
右大將家時ハ能保高能禁裏仙洞公家方其外ノ大義
ヲ兼リ。武士ノ警固可仕フヲハ佐々木定綱江州ニアツテ、
コノ事ヲ勤ム。掃部頭親能^{剃髮号}_{寂忍}。公事訴論ノ事ヲ兼
テ勤之。頼家卿ニ及テ、相模守惟義在京ノ佐々木廣綱
掃部頭親能コレニ從フ。實朝公ニ至テ、武藏守朝政^{時政}_智。
在京掃部入道寂忍相共ニコレヲツム。朝政被誅ノ後駿
在京掃部入道寂忍相共ニコレヲツム。朝政被誅ノ後駿

河前司季時京都守護ノタメ在京實朝公夭弑ノ後武藏
守親廣京都^{承久元年}守護ノタメニ上洛^{承久ノ乱ニツイテ}京都レ
ハラク静謐セズ。此故ニ武藏守泰時相模守時房兩人^承
久三年ヨリ元仁元年テ四年在京シカルニ元仁元年ニ
陸奥守義時卒。コレニ付テ、兩人下向鎌倉。義時亡後二七
日ヲ過テ、元仁元年六月掃部助平時盛^{時房一男}武藏太郎
平時氏^{參時一男}上洛コレ。兩六波羅ノ初也。而ノ掃部助寂忍
ハ如以前在京ノ訴論以下ヲ執行ス。此後鎌倉歷代皆
兩六波羅奉行トレテ、京都ヲ守護ス。コノ下ニ檢断公文
等ノ品アリトミヘタルナリ。

侍所別當

諸侍ノツカサヲ侍所別當ト云侍トハ伺候格勤ノ者ノ惣名也。職原抄曰、凡称侍者親王太武家ニ侍所ト云ハ勇士結番ノ間又ハ守護地頭等ノ歷々出仕ノ間ノトナリ此所ノ司トレテ御家人其外武士凡ノ狼藉無礼ヲ改タメ喧嘩口論ノ出入ラ裁判和平等ノ事ヲツムル也。攝關大臣家ニ侍所別當職事アリ武將家準之也。治承四年十一月和田義盛右大將家侍所別當タリ是公石橋戦後趣房州ノ時義盛請補此職許諾コノユヘニ天下静謐ノ寂初ニ義盛此職ニ補ス。梶原景時ハ侍所所司タリ。

建久三年義盛服暇之次景時一日假此号白地被補之コレヨリ景時別當号ヲカリテ不還正治二年景時滅亡ノ後和田義盛還補セラル凡ソ侍所別當所司ハ諸侍ノ下知ヲツカサトルユヘニ軍旅ノ時ハ不及云行列ノ時モ別當所司寂前寂末ニ伺候ス平家征伐ノ時義盛景時二人範頼義経ニ相從テ軍事ヲ監ス。右大將家上洛時行列義盛景時勤之難色与盛時即從喧嘩時義盛下知レテコレヲ搾取御上洛ノ時大舍人藤原恭頼於野路宿不知御旅館騎馬門前無礼也可令下馬之由景時加下知答申未習其礼旨仍可召進其身之由被仰義盛義

盛窺出于門外、挾墓目追射之、落馬義盛即從等擄取之

第十五之一板

上同十五

云々、豊後守季光与中条右馬允家長喧嘩、兩方縁者馳

集已欲及合戰、仍遣義盛被令和平、建久六年上洛ノ時

三浦義澄即等与足利立郎所從鬪亂、双方方人馳集、令

景時和平之云々、是侍所別當所司ハ侍ノ所犯ヲ糺明ノ

職タルナリ、建保三年義盛戦死ノ後、乃左衛門尉行親

侍所司タリ、建保五年七月被定侍所司立人、所謂式部

大夫卷時為別當相具山城大夫判官行村三浦左衛門

義村等可奉行御家人事、次江判官能範者可申沙汰御

出已下御所中雜事、次伊賀次郎兵衛尉光家者可催促

五月二日戰見東鑑二十一
上同七日

御家人供奉所役以下事、云々、コノ比ヨリ後ハ侍所別當所

司共ニ執權ノ面々下知セラル、ユヘニヤ、以後ハ侍所別當ト

云定職アラサルナリ、而メノ時ノ執權或ハ譜代ノ大名諸侍

ノ上ニ著座メコノイフツムルニヤ、京都將軍家ノ時ハ、

管領ノ當職ニ四職ノ内一人當番ノ人コレヲ兼テツムル

トナリ、信長公秀吉公ニ及テハ、東西南北ノ牧伯乃此職

トメ其方角ノ諸大名ヲ下知スルナリ

小侍所別當

承久元年賴經公下向ノ後、七月廿八日有宿侍等定於

前代者可然輩皆雖著到于西侍當時、娜内不及手廣之

東鑑二十四

重時 陸奥守相模
守泰時第

間無侍仍各候小侍可令駕近守護由云云則今日所始

補小侍別當也陸奧三郎重時年九云云コレヨリ侍所別

仁治元年當
番無故不事
輩立人被正

出仕陸奥掃
侍別當

部助實時奉
行之來鑑此三

建長二年十
二月御所中

頗無入自小
侍亦頻雖被

加催促似無
其詮仍有結

番之儀同十

當ハヤミテ小侍所別當ト云職アリ是御家人駕近ノ輩恰
勤イタス所ノ司ニメ供奉人行列散狀ノフレナカレ等此職
タリシカレハ侍所ハ執權ノ職タリ小侍所ハ御家人恰勤
ノ衆ヲ下知セレムルナリ其職執權ニツイテ相重レ同三十二曆仁
元年頼經公上洛時著御遠州橋本驛先之人々點定家
家間陸奥太郎越後守實時主宿于舞坂松原及戌刻京兆令聞
彼野宿事給仰云實時者小侍別當重職異他尤可候于
御所邊之仁也而依無其所止宿驛上者予暖坐於里家

之條有其恐云云仍令到于實時野宿之間宮内少輔泰
氏駿河前司義村以下人々多以辭申旅宿參件松原還
為諸人之煩早可令入木所給之由各申之又遠山太和
守辭旅店御所近所招請實時之間京兆憚入々礼令歸本宿
給太郎主施面目宿于和州本所云此職ノ重事可見
ナリシカレ凡此職執權ノ衆輔助スルニヨツテ弱年ノ輩モ
亦堪補之貞永元年六月陸奥立郎依病癒辭小侍所別
當而此事為重職子息太郎實時年少之間難讓補之由
雖有其沙汰武州雖重役雖年少可加扶持之由依令申
請給所仰付也云云此時北条弥五郎經時亦十一歲ノ

此職ニシハラク補任ノフアリ

御廐別當

武家重職タリ、右大將家時文治五年奥州ノ上馬三十
足ヲ撰テ御廐ヲ立ラレ、梶原景時別當職ヲ兼ル、景時
侍所所司ヲ以テ乃此職ヲツトム、實朝公ノ時王浦義村
此職ヲツトム、幕府ニライテ馬上覧ノ時ハ義村コレラ奉
行スト云々、弓馬ハ武家ノ要物タルヲ以テ、此職コトニコレ
ヲ優賞セラル、也、見東鑑二十一攝閥大臣家ニ御廐別當預案主舎人
居飼等ノ職アル事、職原抄後附三三ヘタリ、武家準之也

鎮西奉行

鎮西奉行ハ、右大將家ノ時天野藤内遠景コレラツトム、其
後筑後前司資賴法名是佛奉行タリ、貞永元年是佛辭此職
シテ石見左衛門尉資能其替タリ、永仁元年三月初探
題職ト号、北条越後守時兼自六波羅北方鎮西ノ探題
タリ、コレヨリ連綿ノ不正京都將軍家亦此例ヲ追テ、鎮
西ニ探題アリ、西國ノ要事ヲ司トリ、異國襲来ノ備ヲ
十ス、充重職タリ、又中國ノ事ヲ司トルモノノ探題ト号ノ
長府ニ在國ス、京都將軍家時亦然リ、九鎮西古来ハ太
宰府ニ帥ヲ、ヲカレ、親王ノ仕官トシテ、其職掌重シ而ノ權
帥又ハ大貳國務ヲ司トル、是乃武家ノ探題タリ、サレハ大

内義隆大貳ニ任ソ九州ノ事ヲ司トレルモ此ニハナリ

奥州奉行

右大將家時ハ葛西清重奥州奉行タリ其後葛西カ後胤
奥州ニアツテ奉行ス京都將軍家ノ比ハ斯波伊与守家兼
奥羽兩國探題トシテ大崎ニ在住ス奥羽ハ大國ユヘニ古今
凡ニ其奉行重之ナリ上古ハ陸奥出羽按察使アリ陸奥
國ニ鎮守府ヲ立テ將軍ヲ任セラレ出羽國ニ秋田城介ヲ
ラカルイツレモ其職掌甚重レコレ遠國ニテ蝦夷ノ惡賊
必蜂起ララソルユヘナリ武家鎌倉ニ在府ノ後ハ奥州却
テ近藩タルユヘニ其奉行等鎮西ニアハセテハ輕レ

政所別當

摂關大臣家ヲ称政所」定式タリ政所ニハ別當令案
主知家事アリ右大將家上洛辭兩職歸國ノ後建久二
年正月十五日政所吉書始アリ別當ハ前因播守平廣
元令主計允藤原行政案主鎌田新藤次藤井俊長知家
事中原元家岩平小中太也云々將軍家ノ御下文等皆政所ノ
臣家ノ官ニテ諸事ヲ書下入役人也

東鑑第十八
建仁三年將貞朝
軍家政所始
別當達別時政
廣元已下家
司等著政所

多々羅問答
云知家事案
主兩人ハ大
臣家ノ官ニ
テ諸事ヲ書
下入役人也

ト号ス實朝公ノ比ヨリ別當ハ乃執權コレヲツメラル其
下ニ執事ト号メ諸事ヲトリアツカフモノアリ是乃別當

ニカワリ事ヲナス前信濃守藤行光為政所執事其後

伊賀式部秉文元年蒸光宗藤民部大夫行盛等相續メ執事フツ

トムルナリ、將軍家政所始トアルヲハ、寃大義トシテ、天下ノ政務ノ出ル處ナルカユヘニ此職ヲ重メツイニ執權ノツカサトル所トスル也、政所ハ家ノツ也、大臣家ヲハ政所ト云フ通称也

右大將家ノ時ハ、武家ノ職掌政所別當ヲ以第一トス、政務ヲ重ンセラレ、又ハ廣元等カ執申メ、執柄大臣家ノ例タリ、而メ問注所執事コレニツク、武官ニライテハ侍所別當ヲ重ス、其後執權直ニ政所ニ著座メ事ヲトリ行テ、政務ヲツカサトリ、武儀ヲ決スコレユヘニ政所別當侍所別

問注所執事
是ハ訴論人等ノ文書口書ヲツカサトル役ナリ、訟ノアル時執權ノ下ニ付テ事フトリ行ナリ
問注所執事

其申狀ヲ問タツチ、註置ノ奉行ナリ、コノ問注ノ場所ヲ問註所ト云ソノ奉行ヲ執事ト云ヘリ、右大將家時中宮大夫屬王善康信剃髮号
善信コノ職ヲツトム、年々ノ公事訴論ノ文書決断ノ聞書、諸事ノ書付、此處ニ有之ナリ、康信子康俊康俊子加賀守
康俊持三代此職タリ、康持寛元元年ニ名越越後守光時カ逆心ニ同意、コレニ依テ太田民部大夫康連

此職ヲツトム、康連卒ノ子康宗コレニ補ス、尤大職タリ、遠
近大小ノ訟、土民町人等ノ訴論、イツレモ問註所執事コ
レヲトリ行テ、執權ノ沙汰タリ、コノユヘニ評定衆ノ隨一タリ、
問註所後ニコレヲ評定所ト号ス、頼家卿ノ時始テ問註所
ヲ郭外ニウツサル、頼經公新造御所ニハ評定所アリ、レカレ
東鑑新御所
於新造評定
所有評定始
又泰時有評
定見花歌留
同此八寄合
座又云有寄
合

問註所評定所如異ヨリカガメ、一處ナリ、コノ座ニツク衆ヲ評定
衆ト云コノ參會ヲ寄合ト号スルフ、旧紀ニ出タリ
評定衆ト奉行人トイツレモ評定衆ト称スルナリ、而メ評
定衆ハ執權及宿老ノ輩コレヲ評定衆ト云、奉行人ハ政
所執事問註所執事ナト云コトク役義アルノ輩ヲ云ナリ、

貞永式日ニハ、王浦義村ニ階堂行西コトキ大名宿老トレ
テ、評定衆タルナリ

東鑑三十九云、問註奉行人等閣雜務誓占、酒宴放遊為事、不面
謁訴人、不見究證文理非、之間、臨評定座之時、預下問事、
所答申停滯於如此之輩、不可召仕之由、被觸云々、又沙
汰人ト云アリ、問註執事ニテ、事ヲトリニアツカフモノ也、以問
注記、下沙汰人令勘理非ナト、云是ナリ

公事奉行人

右大將家時公事奉行人、前掃部頭藤原親能、能後推守
藤原俊兼前隼人佐王善、康清文章生王善、宜衡民部丞
見東鑑十一

平盛時左京進中原仲業前豊前介清原實後以上七人
コレヲツトム公事ト云ハ訟ノ事ニアラズ殿中ノ諸式何事
ニヨラスコレヲツトムル也時ニトツテ仰ラ秉テ其事ヲ奉
行セシムルノ職ナリ訟獄訴論等ハ問注所ノ職ナリトイ
ヘ凡仰アルトキハ執事ニ立テレハリテコレヲ奉行スイフ
レモ文筆口才右職ノ者凡ナリ三代將軍以後ハ此職掌
アラズ上同十八供奉人散狀以下御所中可然事闕所レス民部大夫行
光為奉行云々行光ハ政所執事トシテ殿中ノ公事ヲ奉
行スルナルヘシ當代ノ目付等ノ役タリ

寺社奉行

東鑑十八

實朝公時建仁三年ニ鎌倉中寺社奉行事更被定之云ミ
此時ハ鶴岡勝長壽院永福寺等ノ大寺社ニ大名三人
究ヲ定メ付ラレテ諸事ノ下知ヲナサレム其後又上同十三板鎌倉中
寺社領等ノ沙汰アツテ右京進中原仲業永福寺公文職タ
リコレヨリ寺社奉行アリ

申次

將軍家ヘ事ヲ執申ノ職タリ義經於腰越獻起請文時
東鑑四之九九板

廣元為申次賴家卿時大阿闍梨尊曉參賀廣元為申次
此職尤重レサレトモ參上拜謁ノ人ニヨツテ其申次次第ア
リ多ハ政所ノ家司亦勤之鎌倉將軍家ニハ無定職京

都將軍家ヨリ申次ノ職掌ヲ定メラル、ナリ。是當世武家
奏者番タリ。

恩澤奉行 獲功奉行

恩澤ハ恩賞ノ儀ナリ。勲功ハ其身軍戦ノ功アルナリ。平日ノ
恪勤奉公ノ勞ヲ考ヘテ、恩賞ヲ行ル。其詮議申狀等
ニアツカリコレヲ紀明ノ執推ヘ申上ルノ奉行ヲ恩澤奉
行ト云。數年ノ間軍戦ノ勲功アル輩。恩澤ニ不浴ソコレ
アルヲアルヘシ。又ハ軍功ノ時其甲乙等ヲタスヲ勲功
奉行ト云ヘリ。凡ニ一人ニテコレヲツトム。東鑑云。長尾光景雖
致度々勲功未領恩賞事駿河前司義村等属恩澤奉行

後藤大夫判官基綱頻執申之仍有沙汰可有勲賞之旨
被仰付基綱云々又筑後知定捧和字欵狀是愁漏合戰
賞事也云々仰勲功奉行人等究源之後可披露評定
次之由直令示付訊訪兵衛入道給云々又信濃國住人
奈古又太郎者秉久三年大亂之時乍施勲功漏其賞由
頻雖愁申之依無便宜之地空送年序訖但猶雖上同三十四有如此
不幸之類於奈古軍忠者勝其中之間相構可被行賈由
故匠作時氏遺命也仍左親衛為不違其趣今日執彼欵
狀加別御詞被仰遣恩澤奉行人師負朝臣之許師負申
御返事云奈古又太郎申勲功賞事折紙給預候畢早可

申入候恐々謹言師負北条太夫將監殿御返事此奉行

アツテ恩賞ニモルモノヲ補闕レ其真偽ラタス也

東鑑十九

二年守護職緩急事有評定彼職補任本御下文等可進
覧之旨先被仰近國是自然恩澤与勲功賞事可有差別
之故也云レカレハ恩澤勲功ハ品アルト也

保司奉行

鎌倉町奉行ナリ保檢断アリ寛元ノ比佐渡前司基綱コ
レヲツトム又清左衛門尉万年九郎左衛門尉等相ツトム
建長ノ比万年九郎兵衛後藤壹岐前司基政小野左近
大夫入道光蓮等奉行

地奉行

東鑑五十二

是又保司奉行ノ内ヨリツトム也文永二年鎌倉中被止
散在町屋被免九箇處今日被仰付于地奉行人等小野
沢左近大夫入道也云

公文職

領地方乃貢納所ノ事勘定等數ノ事司トルナリ右大將
家時元暦元年被新造公文所大夫屬主計允奉行新造
公文所被立門有盃酒云く是乃貢等ラサメ勘定ノ事
書等ヲ入置处近世ノ勘定場ナリ公文ト云トキハ勘定等
術ノ役人ニテ國郡ニ皆有之菊松公文末支大丸公文

見上同第十一

職原云勘七
簡國公文受

領云、見參
議下

廷末十ト云、是ラ地下公文ト云也。又仲業為永福寺公文
同十八

職令奉行寺中沙汰可、明年貢進未、云く

大番 小侍号格 勤 練習番 問見參番 步走

雜色 中間 小者

右大將家以来歴代御家人ノ次第大畧如此ノ諸役奉
公人タリ、代々ニ因テ其名目相違多ソ難一決也

守護職

守護人大犯
三ヶ条之外
不可邊分沙
汰

公家ニハ國司ト云武家ニハ守護職ト云ナリ、上古ハ國造
縣主アカミ稻置ナト、云品アリ、右大將家ニ及テ國々ニ國司ノ
外ニ守護職ヲワケラル、也、守護職ハ大番催促、謀叛殺

害人付夜討強盜山賊海賊等ノ事ヲ守護セシムル役人
タリ、國務乃貢等ニイロフヲナレ國司ハ國務ヲ司トリ、地
頭ハ地利乃貢ヲ弁償考堪セシムル也、後世守護國務乃
貢ヲイロフニ付テ、度々此制法アリ、戦國以来國司領家
ノ沙汰悉相止テ、守護職ノ輩乃國務ヲ制レ、乃貢ヲ収
納スルニ至レリ、シカレハ今ノ守護ハ古ノ守護ニアラサル也
地頭職

東鑑六八云於
庄園者可為

領家沙汰
庄園地頭曰
領家也

是ラ公家方ニハ領家ト云、所々ノ地頭トメ、其國郡庄保ノ
乃貢ヲ収納スルノ役也、右大將家ノ時、國々ニ地頭ヲ付テ
ル、而ノ領家ヘ乃貢ヲ収納ノ事地頭コレヲ下知ス、領家或

ハ滅没スルノ後ハ乃地頭コレヲ領スルトリ、地頭ハ地方ノ事年貢ノワサラ専ツカサトルナリ

留守所

公家方ニハ在廳ト云、國ニヨツテ其所ニ政所ヲ立テ奉行人
在國セシム、此下ニ公文檢断等ノ諸役人アツテ、國ノ公事
沙汰等乃貢進未ノ儀ラタ、スフ也、或ハ小國ニメ隣國ニ
タヨリ、或ハ守護ヲナニ住國ノ地又ハ京都近國鎌倉近所ノ國
六留守所ニ不及也、見東鑑第十右大將家奥州新地頭ニ賜ル下文ニ曰
可早徙留守并、在廳下知、先例有限國事致其勤事上云云
且御目代不下向之間、隨留守家景并、在廳之下知可致

沙汰、但留守家景可同先例、於在廳也、國司者自公家補
任、在廳者國司鏡也云々

檢校職

國ニヨツテ、檢校職アリ、千八之四板東鑑云、河越三郎重負者武藏國惣檢

校職也、付當職四ヶ条有掌事、近來悉廢訖、仍任例可執行
之由、愁申武州恭時之間、為岩原源入經直奉行、今日被尋下留
守所之處、自秩父權守重綱之時、至畠山重忠奉行未之條
符合重負申狀、在廳散位日奉實直同弘持物部宗光等勘
狀留守代歸寂副狀等到未、仍無相違可致沙汰之由云々

允ソ上古ニハ國造

國司也

縣主

領家也

ト云、是神武帝ノ時ヨリ

其制アリ、其後諸國ニ同ラ立テ任年ヲ定メ國務ヲ司トル

コレヲ受領ト号ス而ノ所々ニ領家アツテ、庄園ヲ知行シ目代眼代ラスヘラキ、檢非違使ララキ
東鑑二十八 寛喜三年評定云、守護人者、大犯三ヶ條之外不可致過分沙汰、檢非違所者、廻寛宥之計可專乃貢勤云々事ヲ執行ス、右大將家時、大江廣元カカラライヲ以テ、毎國衙庄園、武家ヨリ守護地頭ヲツケラレ可然トアツテ、文治元年ヨリ此事ヲ行ル、是武家公家ノ領相交テハ、謀叛盜賊等ノ悪人糺明ナリカタキユヘニ、六十余州一同ニ武家ヨリ守護地頭ヲ付テ、國衙庄園ヲ守護セシムコレヨリ一國ニ公家方ヨリ國司領家在廳アリ、武家ヨリ守護地頭留守所アツテ、諸

國ヲ糺明ス、ヤモスレハ守護ハ國司ノ國務ヲ妨地頭ハ領家ノ地利ヲ貪ニ至ル、東鑑二十八 寛喜三年評定諸國守護人者、大犯三ヶ條之外、不可致過分沙汰、檢非違所者、廻寛宥之計、可專乃貢勤之由云々、次同守護地頭有領家訴訟之時不應、六波羅召之由、依其聞、二箇度者可相觸及、三箇度者可注申、闕東之由、先度被仰之處成優恕之儀、不申之欵、自今以後無隱容可言上之旨重可被仰、遣次竊盜之事假令於錢百文已下之小犯者、以一倍令致辨償、可令安堵其身、至百文以上之重科者、拘取一身、不可煩親類妻子所從、如元可令居住、謀叛夜討等者、不及寬宥之由

云々其後式目ヲ撰ノ守護職ノ定メアリ、凡ソ守護ハ其

翌年

國ヲ領スルニ非ス、其所ノ領主タルナリ、武家ヨリ与ヘラレテ
ノトニカヽワス、其所ノ領主タルナリ、武家ヨリ与ヘラレテ
守護スルヲ、守護職ト云、公家ニ奏セラレ官位ニ仕叙シテ
守護スルヲ、武家ノ輩タリ、乃國司ト称ス、鎌倉ノ時執
權又ハ奉行ノ歷々ハ皆國司ト称スルコレナリ、元弘ノ亂
後、公家一統ノ時、シハラク守護御家人ノ号ヲヤメラルトイ
ヘ凡、建武ニ又武家ノ政道トナリテ、右大將家ノ式ヲ守ラレ
守護地頭ヲ付ラル、ナリ、シカレ凡武家ノ威日々ニ興盛メ
國司領家ハ日ヲ追テ衰亡ス、其後應仁乱出来テ、公家ノ

政道一切ニ断絶シ、武家ノ守護職乃國司領家ヲカ子テ、
國務地利ヲ兼并スルニイタルコレヨリ其例トナリテ、今ニ連
綿シ、公義ヘ乃貢ヲ奉ル、モナク守護ノ我意ニカスル
上同第三
ニナレリ、右大將家譴責太内冠者曰、補上同第六一國守護者為鎮
狼戾也云々、コレ守護職ノ本義也、上同第七元二年評定云、諸
國守護人緩急之間、群盜動、令烽起、為庄保、煩之由、國衙
之訴出來、依之條々被凝、上同第八群儀於為、一身定役者還誘、故
實可有懈緩之儀、結番人數各相替差、年限可令奉行、上同第九不
然者被尋聞食國々子細可被改、不忠輩歟之由、雖有
其沙汰、未被一決、以此次彼職補任、本御下文等可進覽

之旨先被仰^レ近國是自然恩澤與勲功賞事可有差別之故也義盛仲業清定等奉行之

目代代官眼代

此三品同義也右大將家時代官目代公義ニカカリ私ノ下司ヲ眼代ト称ス其後ハ代官眼代目代皆同義ニ用之

以上右大將家以未鎌倉將軍家ニライテノ職掌如此右大

將家ノ時妓女遊君ニモ其預ラ定メラレテ里見冠者義成遊

君別當トシテ訴論等ノ事ヲ司トレリ凡ソ官職ハ歷代ニヨ

ツテ斟酌允多シ况ヤ京都將軍家ニ及テハ公方家ノ制ア

ツテ職掌ノ名目亦異也如此義ハ代々ニヨツテ相違アルノニ

シテ不一決モノナリ古來朝廷ノ官位等皆時代ニヨツテ一決セサル事可宍案也異朝官位ノ制尚然代々ノ損益不可勝數也

几官職ヲ定ル事文官武官両職ヨリワカレテ其品節允多シ事アルトキハ乃其司アリ司アラサレハ事ノ紀明不明不明トキハ事ツイニ不正コノユヘニ一事ニ官ヲ立テ其矩ヲ考ヘレム其事ニ大小アルヲ以テ大事ニハ其品ヲワケテ其職ノ司ヲ數敷ニイタスレカレ凡四分ノ外アラス四分トハ頭助^{ウミサテ}桑^{セラ}錄ノ四ヲ置テ事ヲカサトラレムルナリ尚品多カラン職ニハ助桑錄凡ニ大小アリ権官アル是古來ノ定法ニメ北畠親房撰述

見東鑑第十三

ノ職原抄ニアラワセルナリ。武家ノ職掌ト云凡。其名目コトニレ
テ其實此コトワリラ不出也。近代ニ及テ、武職ノ品充多シ。武
者奉行、侍大將、組頭、番頭、旗鎗奉行、弓鉄砲ノ大將、軍監、軍
使等其品不一。其武職ノフトメ、アツカル人アツカル器ノ高下
精粗ヲ斟酌シテ、其職ノ尊卑ヲ定ムヘキナリ。如此儀モ其礼
一定セサレハ、家々ノ制不一シテ、諸家ノ制柰ナルモノナレハ。治
法ノ俗同カラズ、故ニ天下ノ政令ヲ同メ、家々ノ俗ヲタガヘシメ
サルヲ。君子子ノ道ト云ヘリ。左可慎也。必ス古来ノ先例ニヨルヘカ
ラス。左異朝ノ制ヲ必ト准スヘカラズ。時代ノ礼ヲ詳ニ勘弁セ
レムヘキナリ。

武家事紀卷第四十八 別集

臣禮

知人

人君ハ人ヲレルヲ以テツメトス。人ヲレラサルカユヘニ。賢才
知徳ヲ不知、僥奸邪曲ヲワキフル事アラズ。コノユヘニ職ヲ
サツケ官ヲ与ルヲ、非其人シテ、其下ノ諸司皆失其道也。知入
ノツトメ、古未尤重之。右大將家能人ヲリヨク人ヲ御シ玉
フカユヘニ。武家草業ノ大功ヲ立ラレテ、將軍家ノ儀則ヲ万
代ニ建ラル。サレハ平家追討ノ大將軍ヲ、両弟ニ命セラレテ
両弟ノ過不及ヲカリ玉フテ、其相從フ勇將勇士皆コレヲ

抑揚ノ道アリ、奥州征伐ノ後、残黨兼任猶賊ヲナスコノ時

東鑑十

自奥州葛西清重以飛脚其趣ヲ言上ス、兼任相向小鹿

嶋之期、橘次公成打死由利中八維平弃城逐電云々、二品仰云、使者詞相違、欽中八者令打死、公業者逐電、欽兩人共、兼日知食其意趣之上、暗可察云々、清重^カ飛脚内、人病、自迹未^ス言上^ス、公成逃亡中八打死、御旨府合^符諸人鳴、否^フ云々、其知人玉フ量如此ニメ、而ノ能御^レ入玉フ、梶原景時大江廣元王善善信イツレモ、中材ノ輩ニシテ、或諂姦ニ過^ル、或ハ辨僕ヲ事トス、此輩右大將家ノ時、國務政事問註ニワタリテコトクク其要権ヲカサトレリ、其後頼家卿

ノ時無^レ幾程メ景時忽ニ讒奸アラワレテ滅亡ス、廣元善信氏ニ將軍家ニ佞奸ヲカヘテ、京家ヨリ蹴鞠ノ輩ヲ招歌人ヲ招請セシメ、朝政ヲミタリ一言ノ諷諫ヲ尽ス事アタワズ、其悪ヲ迎ヘテ君ヲ邪路ニ^{シテ}至ル、廣元善信ノ兩人右大將家ノ時、政務ノ要路ニ携リ、故實有職ノ輩ニシテ、右大將家ノ後ハ一事ノ強諫アラズ、ツイニ二代將軍氏ニ世ヲ早メ源家ノ後胤断絶ス、廣元善信ガコトキ宿老不^肯^{ウタカ}ハ、時政義時力謀モ全ク不可行ナリ、コレ右大將家ノ時ハ、知アリオアツテ、頼家卿實朝公ノ時愚ナルト云ハアラス、右大將家人ヲ御スルノ道ヲ得玉フカユヘナリ、

義幹事見

東鑑第十三
之十四板

右大將家ヨク知入ヨク御入玉フヲサヘ、上総介廣常ハ諭
者ノタメニ身ヲ失多氣義幹ハ八田知家カタメニ奸謀ニ陷
ラル、レカレハ人君知入ノ道豈容易ナランヤ、頼家卿實朝
公ニ及テハ、蹴鞠詠歌ヲ嗜ミ玉フユヘ、其道ヲ以テ人君ノ
心ヲ蕩其志ニ相應ノ奸人多以テ竈臣タリ、人好ム處ア
レハ、奸謀ノモノ皆是ニタヨリテ、其志ヲ奪ハ定レルヲナリ、
上同十六
左御臺諷諫頼家卿云、凡奉見當時之形勢、敢難用海内
之守倦政道、而不知民愁、娛娼樓、而不顧入嘲、又所召遣
輦更非賢哲之輦、況源氏等者幕下一族、北条者我親戚
也、仍先人頻被施芳情、而今於彼輦等無優賞、利皆令喚

實名之間各以貽恨云々

人ノ好ム事学問ヲ以テ宜シトトイヘ凡、是又日用事物ノワ
サニフイテ、通達セレメンタメノ学問ニアラサレハ、一藝ニワキ
ユヘ、学ヲ以テ主人ノ氣ヲ奪イ竈ヲウクル輦アリ、人ノ
好シテ賞美スルコハ、言行ノ實ニアツクソ、僕ニ謙ルナリ、
コレ又其本源ヲ明ニキワメサレハ、言行ヲ篤實ニコレラヘ
僕約卑下ヲタクミテ、優賞ニ預ル輦アリ、如此事人君ノ
明ラ蔽其心ヲトラカスノ術タリ、コレ知入ノ難处ナリ、頼家
卿色ニ耽リ、上同十六安達藤九郎景盛カ妾ヲ奪フコレニ因テ景
盛貽怨恨ノ由有沙汰テケレハ、乃景盛ヲ誅セラルヘキニ

キワマリ、軍兵ヲ催ス、且御臺所俄以渡御于盛長宅、以行

景盛文

光諷諫猶可被追討者我先可中其箭云々然間乍涉被正軍勢發向云々此時廣元云如此事非無先規鳥羽院御竈祇園女御者源仲宗妻也而召仙洞之後被配流仲宗於隱岐國云コレ廣元一往ノ諷諫ニ不及サヘ甚非本意レカフノ先例ヲ引テ人君ノ惡ヲ張行セシムルノ奸謀史官記之岳其奸言於千歲豈不耻ヤサレハ宏材却テ奸佞ノ媒トナルニ至ルユヘニ學問ヲ嗜アラシハ嗜ニツイテ志ヲ犯スノイナリ武藏守頼之執權トメ義滿公ヲ輔佐ノ時頼之學問宏材ノモノヲ卫ラミ自コレニ親ミテ年數ヲ經其言行ノ

虛實ヲ詳ニノ其後義滿公ヘコレヲワカヘシムト云ヘリ知入ノ道一向骨法人相ヲ以テレテ其本源ヲキワメスレテハ危刃也

世上ノ毀譽ヲ以テ入ヲ舉錯スル事大概世俗ノ風タリ人多クハ智暗アラシシコノユヘニ我難成トヨクスルモノヲ以テ賢材ナリ智者ナリトラモフコレ大ニ人ヲアヤヘルノ道也人ノナリニクキフハ財宝ヲ輕ノ塵芥ノコトクラモイ官祿ヲステ身ヲヘリクタリ色欲ヲ絶ノ愛執ヲヤムル皆人ノナリニクキフ也而ノ又其氣質ニヨツテコレヲ成ヤスクラモフモノアリソノ上當代ノ道世者浮屠釈門ノ世ステ人ナトハ財利官祿名

聞色相トモニ断絶ノ輩古今不乏コレラ善人ナリトテ國務
ライロワセ文武ノ政道ニタツサワラレメハ一向無面目ノ事
而已ナラン世ノ誉ル所半ハコレニアリレカルユヘニ人ノ誉ル
处必トナレカタレ毀リモ亦如此賢哲ノ才人ハコトノ道ヨ
リラレテ勘ルエヘニ不中^{アタマ}凡不遠ノ人才ヲ可得ナリ且又人
ノ毀譽ラ以テ人君群臣ヲ賞罰アランニハ人々跡外ラカ
サツテ人ノ誉ンカラ欲スルニナリスヘレ古ノ人ハ人ノカラカ
ラズ我眼カラ明ニコレラ以テ人ラハカルユヘ人ノ眼カラ
タノムアラズトイヘ凡人ノ眼カラカリテ我眼力ニテ斟酌
セレムルニアルヘレ

人君群臣てチく多ケレハ此中ニ材智賢徳ノ者イカハカリ
モアリナシナレ凡知人ノ量ナキユヘミヘサルナリ外ノ人ラ不
可求御家人ノ子孫ノ中ラアミテ其人ラトリ出レ玉フニ
アリト云人アリ此說似テ不^{アリ}是^{アリ}也材智賢徳ハ人中ノ
宝ナリ宝ハ必國中ニノミアルニアラス天下材木不可勝数
メ沈水ハウニ不出西蕃ヨリ来テ宝タリ天下ノ衆草不
可勝数レテ木綿ハ南蛮ヨリ種ラ得テ以テ國民ノ用タ
リ九宝トナリテ人ノ貴フモノ必我家我國ノ出ルモノニ
非スコラ以テ古來ノ人材賢者皆庶民陪臣ノ内ヨ
リコレラ選舉メ以テ人君ノ用タラシメ玉ニアリ右大將

家ノ時、廣元善信景時等カコトキ昭近ノ重臣皆御家人

ノ内ヨリ出ルニアラス篠山丹三ハ千葉胤信カ即従ヨ

東鑑第十九

リ恪勤ノ内ニ入リス中民部大夫仲業ハ掃部頭親能力
家人ナリ而ソ依右筆藝問註所ノ寄人タリ歴代ノ將

軍家皆陪臣ヲ召出サレテ後ニ重臣トナレルを多ナリ

敬大臣

大臣ト云ハ家ノ重臣ナリ重臣ト云ハ譜代重代勞功ノ臣
下又ハ執權職ヲ命セラルノ輩皆將軍家ノ大臣タリ
如此輩ヲハ崇敬アラサレハ其下知下ニ通レ難キカユヘニ
コレヲ敬シテ其權威ヲナサレムルモノナリ大臣ニ徳アリ知

アル輩ハ乃將軍家ノ輔佐師範凡云ヘシ家ニツタワレル
大臣其徳知ノ生質タトヘ中材タリト云凡人君コレア不
蔑如其家ノ立カコトク崇敬アレハ群臣其誠ヲ感メ弥忠
勤ノフトメアリ中材ノ大臣モ亦事ニフレテ其邪僻ヲナスト
アラサルナリ右大將家ノ時古老ノ重臣ヲ愛レ礼ヲ厚クタ
タレ玉フ事曰紀ニ所著多シ建久三年五月多賀二郎重
東鑑第十二
行被公权所領是今日江間殿息童金剛殿歩行而令真
遊給之處重行乍令乘馬打過其前訖幕下被聞召之禮
者不可論老少且又可依其仁事歟就中如金剛者不可
准汝等傍輩事也爭不憚後聞哉之由直被仰合重行乍

怖畏全不然且可被尋下于若公與扈從人之由陳謝仍
被尋仰之若君無如然事之旨申給奈古谷橘次又重行
慥下馬之由所申之也于時殊有御氣色不忍後糾明忽
構謀言一旦欲贖科之条云心中云所為太奇怪之趣仰
及數廻云云頼家卿時新田上西上同第十七
大次助卒無程於掃部
入道龜谷宅可有蹴鞠之由被定臣御臺所以行光被申
云故仁田入道上西者源氏遺老武家要須也而去十四
日卒去未及七日御興遊定貽人之謗欵不可然云金
告於蹴鞠者不論機嫌之由雖令申給終以令抑留給云
云又同三十三延應二年冬十二月廿一日前武州泰時相具評定衆頼蒙

令參右大將家法華堂被修佛事莊嚴房僧都行勇為尊
師是依爲故隱岐次即左衛門入道行阿初七日忌景也
凡向後於評定以下携公事輦之沒後者必可勵追善之
由及衆談云古來大臣ニ礼スル事如此ナリ

大臣ノ息ハ將軍家御前ニライテ元服ヲ加ヘラル、事故
實ナリ、大臣ノ宅へ御行ヲ御成ト云儀式アルフ也、右大將家
ノ時年々御家人ノ方へ渡御或ハ於殿中、獻燒飯盃酒、
浦ノ三崎ニライテハ義澄必入駄餉ヲ奉ル、建久五年三崎
津ニ山埜ヲ建テ、濱御所ト号ス、度々コノ地ニ遊覧、三浦
義澄經營ヲカーフ、頼家卿實朝公ノ時毎年正月御行始

必ス大臣ノ家ニライテ盃酒アリ、其外不時ノ御行多シ頼
経公鎌倉下向ノ後ハ毎年正月御行始、又ハ執權宿老ノ
宅ニ御行ノ儀式等三代將軍ノ時ニハ事カワリテ尤羨
麗ラツクサル、安貞二年七月王浦義村田村山莊ニ渡御
義村新造御所一宇、自其砌至門田造渡廊、草花盡貞殖
東南云々、又仁治二年為方違秋田城从義景武藏國鶴
見別庄ニ渡御アリ、面々刷行粧、頗以壯觀云々、各笠懸
犬追物等ノ御遊アツテ、所課ヲ定メラレ、面々思矢数云々、
其後宗尊將軍ニ至テハコトニ親王家タルノエヘ執權重臣
ヘ御行ノ義在其儀式アリ、時頼執權トゾ度々彼亭及
例タリ、

愛士

大臣ハ腹心ノコトク衆士ハ四支一体ノコトシ、大臣アリト云

見東鑑四十六之大木板

寂明寺

ニ御行アリ、レカレ凡結構他ニコトナルノ未勘、康

見東鑑四十六

元元年政村

陸奥守

奉執權ノ始、彼別業

常葉亭

ニ渡御、獻物

并座敷ノ粧嚴供奉、男女ニ贈等儀式アリ、又

日四十九

文應元年

=入道重時

陸奥守

亭

極樂寺

ニ渡御、又殆同政村

カ

經營、其以

後將軍家渡御作法甚極華麗、室町家ニ及テ號御成管
領諸大名各儀式ヲツクロフ、近ハ承祿四年義輝公王好
義長宅ニ渡御、進物盃酒猿樂纏頭ノ儀式後世御成ノ
例タリ、

凡衆士ソナワラサレハ腹心ノ用不_レ諧ナリコノユヘニ古ノ名將
皆士卒ヲ愛レテコレヲ御スルニ以道サレハ我一休一身ノ
内皮毛ノ末トテモ我身ノアル處ニハ性心遍滿メ氣血流行
ス而メ一身全レ武將ノ士卒ニオケルモ亦同之也右大將
家以来代々ノ名將皆無不_レ愛士右大將家ニ所御参詣
路次日未御参伊豆權現而至三嶋_{トキ}曾根_{トキ}路次於石橋山
御覧佐奈田余市豊三等墳墓御落渡及數行治_{トキ}兼戰被
奪命今更多御哀傷此事於御參道殊可憚之由有沙汰
因此定_ル三嶋曾根御参詣以後自伊豆山還御之義云く
上同十三
又曾我祐成時宗富士野狼藉時感_{セイ}時宗之勇孝雖有御

猶豫祐經息童_{字太房九}依愁申被梶首云く又祐成時宗寂
後事等送母許文被召出之處幼稚欲度父歟之旨趣悉
載之將軍家扶御感淚覽之永可被納文庫云く又建久
五年三浦矢部卿建立一堂思召立是為被訪故介義明
没後也云く此外佐竹力生捕ノ男直ニ同拜謁之次有
可申事ト云ケレハ乃具其旨_レ尋ラレテ被宥之御家人ニ
列セレメ岩瀬_{トキ}太郎ト号セラル參衡力郎從由利八郎
生捕ノ身トレテ將軍家ト問答直言ラ吐クトイヘ凡_レ被宥賞
ノ類皆勇士ヲ愛レ玉フノ志フカキカユヘナリ天下ノ大小事
一人ノ有功ニテナリカタレ天下ノ勇士心カラツクシ身ヲ委

チテ功ヲ立ルカユヘニ、名將ノ草業不日ニ立ツコレヲ多カト云
ヘリ、多カラ以テナス事ハ不勞^レノ功速ナリ、愚將ハ多カラ
不知メ自ノ功ヲ立シトスコノユヘニ、勞メ功サラニ不成、多力
ハコレ天下ノ衆ト凡ニナス處ナリ、サレハ士ヲ愛スルノ道ハ武
將ノ礼ナリ、右大將家平家退治ノ時、範頼西海ニアリレ
ニ書ヲ賜リ、東鑑第四自關東所被差遣之御家人等皆悉可被憐
愍就中常胤不顧老骨堪忍旅泊之條殊神妙、拔傍輦可
被賞翫者云々、其愛士賞功セラル、ト如此ナリ

正職分

士ヲ愛メコレヲ正スニ職分ヲ以テセサレハ、士卒恩ニホコリ愛

ニ潤レテ、君用ヲ不事^レイニハ身ヲ失テ家ヲ亡ホス、コノユ
ニ愛スルニ道アルヘシ、道ヲワスレテ節ヲ精クイタサランハ
皆テコトノ愛スルニ非ナリ、右大將家有勢ノ大名ヲ崇敬異
于他中ニモ平賊ニラソワレテ武州ニ蟄居ノ時、上総介廣
常有勢ノ大名トシテ馳付ケルニ、軽骨ノ愛十ク、其遲参
フトガメ玉フ、廣常始ハ害心ヲ挾トイヘトモ此猛威武量ニ
フソレ、忽害心ヲ変メ源氏ニ屬スルノ類可并案也、サレハ
右大將家ノ時ハ勇士ノツトメ武藝ヲ先トメ遊山翫水ノ
樂アリト云、先笠懸犬追物等ヲ真行アツテ、各其矢貞
ヲナサシメ、其職分ヲタ、サレテ其後ニ時ニトツテノ盃酒延年

アリコレ乃將軍家ノ儀式トナリテ歴代此式ヲ守ラル愛ス
ルニ道アリト可謂也

右大將家自官位ヲ謙退アツテ、兩職ヲ上表其志如此ノユ
ヘミ大名宿老ノ輩トイヘニ御家人ノ官途甚大節タリ、源
家ノ高族北條ノ貴族ノ外、國司守護職等ノ役儀アラス。
東鑑第十
建久元年上洛ノ時、御家人ノ勲功アル輩二十人ヲ可舉
之旨院宣アリトイヘニ、將軍家コレヲ辭シ申サレテ左^ト右^カ兵
衛尉左右衛門尉等ニ仕セラル。凡ソ武家御家人ノ任官、
金告武衛左右近衛將監内舎人等ヲ拜仕コレ恒式タリ。

鎌倉將軍家歴代ノ制如此アリ。泰時執權ノ時、御家人等
中任官之輩不勤行役事、依有御恩召進用途。左右衛門
尉分百足、左右兵衛尉分七十足、左右近衛將監分三十足、
内舎人分二十足等也。不供奉行幸等者為毎年役可遣
濟被仰。諸國守護人云々サレハ國司職ニライテハ御家人
ミタリニ任スル一アラス。實朝公時和田左衛門尉義盛可
被举仕上總國司之由、内々望申之。將軍家被申合^ト臣御
臺所御方之處、故將軍御時於侍受領者可停止之。由其
沙汰訖仍如此類不被聽被始例之條不足姓口入之
旨有御返事之間不能左右云々又時賴執權ノ時野本

次即行時名國司所望事父時負任能登守之時不付成
功直令解除之上者如彼例可爲臨時內給之由申之爲
清左衛門尉奉行今日有沙汰其父時負屬越後入道勝
圓在京之時被内举自然令仕欽被堅法之後法之者不
足爲例之間輒_{ノヨギ}覃許容之旨被仰出又臨時內給事於
三分^助官等者依事體可被申請之至國司以上者可被停
止其競望之由云々古來御家人任官等ヲ重ンセラル
事可并案是愛士トイヘ凡其職分ヲタサレ君臣上下ノ礼
ヲ重メ其分ヲコヘシメズ其虛名虛位ヲナサレメサルノ道ナリ
古來武家ニ執レ未レル官_{輔貞尉上云也}左右衛門尉左右兵衛尉コレラ

四府ノ尉ト云此外式部丞諸司助イツレモヨレヲ重ス仁治
四年評定式部丞并諸司助事准_{ノヨギ}貞尉功以百貫文
可被申仕之由雖有其沙汰自今以後不可有其儀且於
侍所望者一向可被停止之云々後世ノ俗皆四府尉ヲ以
テ押メ假名トスル事モ古來武士此官ヲ貴ユヘ也_{四府尉式部丞}
諸司助ニハルカニ劣ノ官タリトイヘ武家ニコレヲ執レ
未ルユヘニ古未必功百貫文ヲ用アリ

凡ソ官名國司ノ名時代ニヨツテコレヲ賞レコレヲ不賞アリトイヘニ武家ハ武官ヲ以テ重スル也

波加竹馬是國朝方塊書人詩句。此詩出於
王昌齡《長安歌》。王昌齡，字少伯，河東人。
唐玄宗時人。善詩，尤長七言絕句。有《王昌齡集》。
此詩首句，王昌齡原句為：「長安歌是國朝方塊書人詩句」。
次句，王昌齡原句為：「波加竹馬是國朝方塊書人詩句」。
第三句，王昌齡原句為：「長安歌是國朝方塊書人詩句」。
第四句，王昌齡原句為：「波加竹馬是國朝方塊書人詩句」。

27X
21
49

